

ナヴァホ族の球戯に関する研究 —異文化としてのベースボール—

松 浪 登久馬

抄録

アメリカ合衆国が独立を宣言（1776年）してから現代に至るまで、北米先住民族の文化を理解し、異文化の融合を平和的に進めてきたとは言い難い。

ナヴァホ族は強制移住先であるボスケ・レドンド（ニューメキシコ州）にてベースボールに類似した球戯をおこなっていた。当該部族は異文化の強要や生活様式の変容が求められる時代と場所にありながら、独自の解釈を混合させてベースボールを吸収したと考えられる。そこで本研究は当該球戯の形式と用具について検討することにした。

キーワード

ナヴァホ族、異文化、球戯

The Study of the Navajo Ball Game —Baseball as Other Culture—

Matsunami, Tokuma

Abstract

The purpose of this study is to examine the ball game which the Navajos were playing.

The United States could not understand the Native Americans even after the Declaration of Independence (1776). It is hard to say that America tried to understand other cultures. Therefore, it is still left as a problem in the present age.

The Navajos were forced to migrate to Bosque Redondo (New Mexico). The ball game which resembled baseball there was played. It is thought that their ball game absorbed baseball as other culture in mixture with original understanding.

Key Words

Navajo, other culture, ball game

目 次

| | |
|----------------|--------------------|
| I. 研究の意図と着眼点 | III. ベースボールに類似した球戯 |
| II. 北米先住民族について | 1. ポジション |
| 1. 強制移住と同化政策 | 2. ルール |
| 2. ナヴァホ族について | IV. 球戯の用具 |
| | 1. ボール |
| | 2. バット |
| | V. 結び |
| | ・注記及び引用・参考文献 |

I. 研究の意図と着眼点

近代オリンピック⁽¹⁾は3回の開催中止を経験しながら、2012年のイギリス・ロンドンで30回（開催は27回）を数えた。2020年には約半世紀ぶりに東京での開催が決まっている。異なる価値観が混在する世界を一つにするイベントをスポーツが開催できるのは、言うまでもなく定められたルールを有するからに他ならない。この共通のルールの成立はヨーロッパにおける資本主義の台頭と切り離せず、スポーツは合理主義の名の下で遊戯から競技（＝近代スポーツ）へと移り変わりながら拡大していった⁽²⁾。この過程でスポーツは①達成原理②競走原理③記録主義といった特質⁽³⁾を帯びていくのであり、それまで持っていた独自性は薄れ、次第に変容するか消えていった。その独自性は風土によって醸成されてきた独特の文化と密接な関係にあり、この理解が異なる価値観を理解する方法の一つと言えよう。その為にはルールの統一された近代スポーツではなく、民族の独自性が認められるもの（＝民族スポーツ）に目を向ける必要がある。

ヨーロッパ人が海を越えて植民地を築くようになっていくと、アメリカをはじめ独立する国家が現れるようになっていった。アメリカ合衆国は植民地時代から北米先住民族との溝を埋められず、現代においても払拭できているとは言い難い⁽⁴⁾。独立後には北米先住民族に対して強制移住や同化政策を施行し、北米先住民族のアメリカ人化を促してきたのである。

北米先住民族が多様な民族スポーツを有していたことは S. Culin が1907年に発表した古典ともいえる研究によって明らかにされている⁽⁵⁾。用具のスケッチを交えて北米先住民族の民族スポーツの分類をしている。ボールを使用するものは「Ball」に分類され、更に10種に細分されている。ここであげられているものは、近代が作り上げてきた球技（Ballgame）と異なる独自性を持ち、近代スポーツの特質を欠く球戯（Ball Game）と言える

ものである。こうした研究を受けて、特定の部族の特定の民族スポーツについて論究したもの⁽⁶⁾、あるいは総合的な分析に着手したものが進められるようになっていった⁽⁷⁾。

北米先住民族がアメリカ化していく過程の中で、独特の民族スポーツ（≠近代スポーツ）は失われたか、あるいは近（現）代化して僅かにその姿を残しているに過ぎない⁽⁸⁾。北米先住民族が無文字文化であったことで、こうした無形の文化を本来の姿で残すことは難しい。そのため文化人類学者たちによってあらゆるものの保存（文章化）が進められたのである。他方、アメリカ化が進む過程で北米先住民族が欧米のスポーツに触れる機会が設けられるようになっていった。そこでのスポーツは近代スポーツのルールに基盤を持ちながら、完全ではない結合をみることもできる。こうしたスポーツ・シーンを文化の変容あるいはヨーロッパの影響として捉えた研究は少ない⁽⁹⁾。「保存」と比すればこの数が僅かなのは、そういった局面を記録する機会が希少なことで、それだけ急速にアメリカ化が進んでいたことを逆説的に示している。スポーツが「実際に行われる文化的背景の基本的な諸価値を常に反映」⁽¹⁰⁾するのであれば、異文化は独自の文化を反映させて吸収されるはずである。

ナヴァホ族（Navajo）は南北戦争の間、アメリカ合衆国軍によって563キロにおよぶ移住を強いられた。1864年から4年間、移住先のボスケ・レドンド（ニューメキシコ州）で生活様式の変化を強要される。そこで本研究はナヴァホ族（Navajo）がおこなったベースボールを例に、北米先住民族における文化の受容について言及することにした。

II. 北米先住民族について

1. 強制移住と同化政策

北米先住民族の祖先はアジア系人種であり、およそ7万年前から1万年前の間にベーリング海峡が陸続きの時代にアジア大陸からアラスカに移ってきたといわれている⁽¹¹⁾。その子孫が南北アメリ

カの各地に広がり、風土に適応しながら多様な文化・文明を発展させていった。

1500年代にヨーロッパ諸国が進出するようになり、1776年にイギリス植民地によって独立宣言が公布された。東部13州が成立し、経済的に急速な発展を遂げると同時に領土の拡大を進めていった。1830年に第7代大統領アンドリュー・ジャクソンによるインディアン強制移住法の成立が先例となって、各地で北米先住民族が故郷からの立ち退きを強要される。1848年にカリフォルニアで金鉱が見つかり（ゴールドラッシュ）西部開拓が進み、北米先住民族と衝突する機会が増加し、この時代を中心に西部劇は描かれている⁹²。並行して北米先住民族にヨーロッパの教育を施して共生する道も模索された。この政策は南北戦争によって足踏みするが、1870年代後半には政府直轄の全寮制インディアン学校設立が加速度的に進んでいった⁹³。全寮制学校の利点として

- ①子供を親元から引き離して、インディアンの文化的背景を遮断することが出来る。
- ②躰・マナーを強制的に植えつけることが出来る。
- ③教育的内容を管理統制することが出来る。

の3点があげられ⁹⁴、各部族の子どもが学校に集められ、独自の文化に染まる前にアメリカ人としての価値観を植えつけられていった。すでにアメリカ社会には多くのスポーツが溶け込んでおり、彼らもインディアン学校の中でこれらを学んでいくのである。インディアン学校では生活様式や言語はもちろん、アメリカ社会に同化して生活ができるように就業訓練もなされたが、貧困世帯に70%が属しているといわれている⁹⁵。

2. ナヴァホ族について

アメリカ合衆国で認識されている北米先住民族の部族数は500を超え、商務省の調査によれば

その総人口はおよそ188万人である⁹⁶。ナヴァホ族の人口はおよそ22万人であり、チェロキー族（Cherokee）に次いで2番目に多い。ヨーロッパの侵出とアメリカ建国による影響から、現代の北米先住民族は他部族、あるいは他人種との混血である場合がほとんどである。

アリゾナ州北東部を中心にニューメキシコ州、ユタ州の保留地に居住する。狩猟採集の後に農耕へと生業を移していったが、スペイン人が持ち込んだヒツジから牧羊を始めるようになる⁹⁷。同時にそれまで未知であったウマも手に入れ生活に取り入れるようになっていった。ホーガンと呼ばれる土製の円錐型住居に居住していた。

1887年にアメリカ合衆国はドーズ法を施行され、北米先住民族の土地が割譲されていく。ナヴァホ族の土地に生産性は見いだされず、ヨーロッパ系人種の流入を抑えることができたことから、他の北米先住民族と比較すれば独自の文化を伝えていとされている⁹⁸。ナヴァホ族が最も苦しんだ時期は南北戦争の時期であった。1864年から1868年の間に563キロ離れたボスケ・レドンドへの移住と農耕民への変化を強いられた⁹⁹。この強制移住は奴隷解放を宣言（1863年）する北軍によってなされ、アフリカ系アメリカ人と北米先住民族のマイノリティ問題は根本を別にすることを示唆している。

伝統的な北米先住民族の習慣がヨーロッパの影響下で変化・消失したことは、同時に量的にも質的にも認識が困難なヨーロッパ由来の文化を吸収したことを示す。こうした事実は北米先住民族の球戯にも確実に浸透していった。ナヴァホ族がボスケ・レドンドに拘束されている間にここを管理するアメリカ人からベースボールを吸収することになるが、そこでは異文化の混合を見受けることができる。このベースボールに似た球戯は「Run around ball」と呼ばれていた。ナヴァホ族はまだ英語を主言語としていたわけではなく、ナヴァホ語で「Aqejólyedi」という名称で呼んでいた（表1）。

表1 ナヴァホ語の対応表

| 英 語 | ナヴァホ語 |
|-----------------|-----------------|
| run around ball | aqejólyedi |
| bark | azhí' |
| ball | joł |
| bat | be-akáli |
| north | na' ilyed |
| picher | atch'í' náalni' |

Stewart Culin, Games of the North America Indians, Dover, NY, 1975, pp.789-790 より作成

Ⅲ. ベースボールに類似した球戯

1. ポジション

ベースボールと冬季にこれを室内でおこなうために考案されたソフトボールといったベースボール型球技では、ホームベースを起点に反時計回りに進塁し、1周することで得点となる。進塁するためにはピッチャーから投球されたボールを、ホームベースの両脇に設定されたバッターボックス内でバットを使用して打つことが条件の一つとなっている。進塁が認められる打球は、ダイヤモンド²⁰⁾とその延長線上のフェア・ゾーンに飛んだ場合である。

球技のほとんどは、ルールで定められた同数同士の人数で攻守が展開される。ベースボール型球技では攻撃側であるバッター1人に対して9人が守備をする（ランナーがいない場合）という特徴

がある。バッターが打撃するボールは対峙するピッチャーによって投球されるので、攻守は1対1の構図から始められる。投球が打たれなければ得点の機会は減少するので、緩急の他に多種多様な変化球が発明され、投球に織り交ぜるようになっていった。

Aqejólyedi でもベースはフィールド内の4箇所にも置かれている。それぞれのベースに便宜的に方角の名称を当てがわれているが、ナヴァホ族がどのような名称をつけていたのかは不明であり、実際の方角に合わせて置かれたものではない²¹⁾。東とされるベースは進塁の際に最初に向かうベース（ファースト）であり、南（セカンド）、西（サード）、北（ホームベース）の順に時計回りに進塁していく（図1）。

ピッチャーにはナヴァホ語の名称があるが、バッ

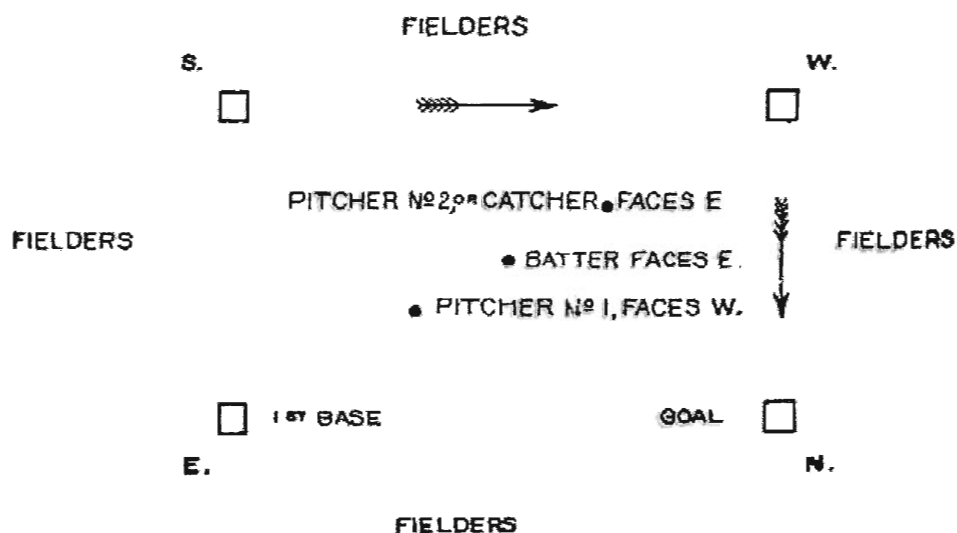


図1 ナヴァホ族によるベースボール

Stewart Culin, Games of the North American Indians, Dover, NY, 1975, p.790 より引用

ターを含めてあらゆるポジションの名称は見当たらない。ピッチャーは東を背に立ち、西の方向へ向かって投球をおこなう。西を背に東に向いてキャッチャーの存在が認められる。各ベースを守る内野手の存在はなく、各塁間後方に位置するフィールダーだけである。おそらくフィールドの規格と選手の人数に定められたものはないので、このフィールダーが外野手を兼ねるものか、遊撃手のような存在なのかは予想の域を出ない。

バッターの立つ位置はホームベース脇ではなく、ダイヤモンド内のピッチャーとキャッチャーの間であり、打席には1度に2～3人のバッターが同時に立つ場合もある²²。

2. ルール

ベースボールではピッチャーから投球されたボールをバッターが定められたフェア・ゾーンに打ち返した時、ランナーとして進塁することができる。守備側は打球がフライの場合、そのまま捕球するとアウトを1つとることができる。打球が転がってきた場合、守備選手はボールを拾い上げ、ランナーがベースに到達する前に、味方守備選手に送球して捕球された場合、アウトを1つとることができる。また、捕球したボールでランナーにタッチした場合もアウトをとることができる。

ゲーム前には打順が決められており、アウトをとられたバッターは次のバッターと交代し、次の打順が回ってくるまで待たねばならない。

定められたストライク・ゾーンへの投球をバッターが見逃した場合、1回のストライクをとられる。3回のストライクが1つのアウトとなり、3つのアウトによって攻守が交代するというのを9回繰り返す。ゲームに制限時間はなく、ゲーム終了時に得点の多い方が勝ちとなる。3の倍数の例外として（ストライクではない）ボール4つ（フォア・ボール）によってバッターは進塁することがあげられる。

Aqejólyedi の場合、ピッチャーの球種は高いか

低いかのボールが投げられ、キャッチャーが補球する。バッターは投球されたいずれかのボールを狙い、バットで打つ。ベースボールと異なり、ピッチャーとバッターの対峙はダイヤモンドの中央でおこなわれるため、打球にはフェアもファールもない。バッターはボールをバットに当てて飛ばした場合、東へと進塁をする。ベースボール型球技と大きく異なる例として

バッターは2～3回のストライクをとられた後、打席を離れて別のタイミングのいい時に再度、打席に立ってもかまわない。4回目のストライクをとられると、打者は最初のベースに向かって走らねばならない。

ことがあげられる²³。不利な状況から一旦、離れることが許され、再び機会を得ることができる。それまでのストライク・カウントがどのように扱われるのかは不明である。ストライク・カウントの累積によるアウトの概念はない。フォア・ボールで歩いて進塁するのではなく、4回のストライクを見逃したバッターが走って進塁しなければならないことは、おそらく現代でいうストライク・ゾーンの設定はなく、1回の投球が1つのストライクということを示している可能性がある。

ベースに到達したランナーは他のバッターがボールを打つまで進塁できない。守備側はボールを持ってランナーにタッチするか投げ当てることでアウトをとることができる。ランナーはベースに達するために様々な方法で守備陣をかわす他に持っているボールを叩くなど、あらゆる方法が許されている。ランナーがダイヤモンドを1周すると1点となる。勝利の条件はゲーム終了時に得点の多い方か、ゲーム前に両者の話し合いによってあらかじめ決めておいた得点以上をした方が勝利となる。

IV. 球戯の用具

1. ボール

ボールの製造方法について①巻き球②編み球③詰め球系ふくらませ球④ふくらませ球⑤切り出し球といった方法が古くから知られている。中南米ではゴムの木の樹脂を固めたゴムボールが使われていた。このボールの製造方法は後の産業の発展によって新たな材質を鋳型で固める⑥鋳型球の発想に類似している。テーブルテニスやボウリングのボールというものが製造され、その性能によってそれらのスポーツは現代においてその特性を維持・発展できているといえよう。ベースボールのボールは我が国の『公認 野球規則』によると

ボールはコルク、ゴムまたはこれに類する材料の小さい芯に糸を巻きつけ、白色の馬皮または牛皮二片でこれを包み、頑丈に縫い合わせて作る。重量は五匁ないし五匁四分の一（一四一・七_{グラ}～一四八・八_{グラ}）、周囲は九_{インチ}ないし九_{インチ}四分の一（二二・九_{インチ}～二三・五_{インチ}）とする。

【注】我が国では牛皮のものをを用いる。

とされている⁹⁴。芯に糸を巻きつけたもの（巻き球）を動物の皮で包む（詰め球）複合した製造方法でつくられている。本書は「原本に忠実に」訳して制作し、我が国の野球で特別な適用をする場

合などは、注意書きが添えられている。ボールの製造方法はこのように世界的に統一され、国際試合やメジャー・リーグの試合で均一的なものが使用される。

Aqejólyedi のボール（図2）は灌木の表皮をシカ、ヤギ、ウマといった動物の皮で覆い、シカの臍かバックスキンの切れ端で縫い閉じた物で、クマ、コヨーテ、イヌの皮で覆うことは許されなかった⁹⁵。表面を覆う材質として許される動物の判断材料は、ナヴァホ族が食用にしてもタブーとされない動物かどうかである。同じように詰め球を使ってラケット⁹⁶をおこなっていたチェロキー族は

ボールを活発にするために特別な薬草と尺取虫を中に詰め込んだ。（中略）ボールが跳ね回るようにするためにボールの中にノミが詰め込まれた

ものを使用していたという報告がある⁹⁷。北米先住民族がボールの性質を向上させるため、材質に科学的根拠ではなく、独特の宇宙観を持ち込んだ。尺取虫であればその弾力性が、ノミであればその活発性がボールに宿ると考えていたのである。北米先住民族が自由な発想でボールの改良をおこなっていたとすれば、ナヴァホ族も何かしらボールに施したことが考えられる。

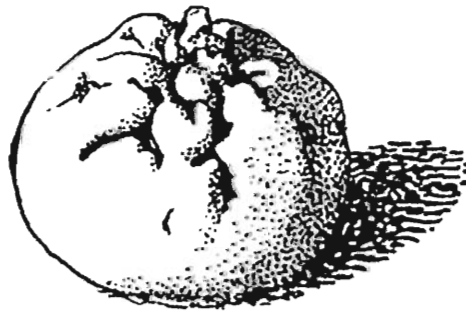


図2 ナヴァホ族のボール

直径：11/2インチ（3.81cm）

袋状のシカ皮に詰め物をして口を紐で締めている。

Stewart Culin, Games of the North American Indians, Dover, NY, 1975, p.623 より引用

2. バット

ボールを打撃するのに用いるバット（図3）の材質はオーク材であり、棒状のものを熱い灰の中に置いて曲げ加工の技法で作成する。水分を多く含んでいる木材が熱せられると軟化する性質を利用する技法であることから、水分不足のオーク材では屈曲させることはできず、折れてしまう。このバットはナヴァホ族の球戯であるシニー²⁸に用いられるスティックと同一のものであるが、シニーが曲げられていない先端部分を手に持ち、曲げられた先端部分で打球するのに対し、Aqejólyediではシニーとは反対の方法で打球をする。ボールとバットについて B. Haile²⁹は

ボールは悪い傾向の表れであり、作物が育ち始めてからすぐに収穫を終えるまで無いものしなければならない。（中略）オーク材は堅くて耐久性があり、ナヴァホ族の宗教儀式的ほぼ全てで用いられる。私にはその権限はないが、それ（オーク材）が神の力を示すために使われていると信じたい気持ちにさせられる。

と述べていることから現代のベースボールに使用するバットに求められるような、軽量で飛距離を求めるものではなかった。彼らにとって馴染みのあるボールを打つ球戯の用具を作成して応用的に使用している。

V. 結 び

アメリカ合衆国におけるアメリカ先住民族に対する政策は異文化を理解する方法で進められなかった。強制化においてナヴァホ族は今ではアメリカ合衆国の国技の一つと数えられるベースボールを以下の形でおこなっていた。

- ① ベースは4箇所を設置され、進塁方向は時計回りであり、1周することで得点となった。
- ② ピッチャーは最初に向かうベース（東）を背に立ち、3番目のベース（南）方向へ投球を行った。
- ③ キャッチャーは3番目のベース（南）を背にした位置で捕球していた。
- ④ バッターの立ち位置はダイヤモンド内のピッチャーとキャッチャーの間であり、2～3人が同時に打席に立つ場合もあり、途中で打席を離れ、再び戻ることを許された。
- ⑤ 守備側が打球を捕球した後、ランナーに対してボールをタッチするか投げ当てることでアウトとなった。
- ⑥ 勝敗の決定は得点の多い方か、あらかじめ決めておいた得点を奪った場合の2つの方法があった。
- ⑦ ボールの材質について使って良いものと悪いものとがあり、彼らの信仰に基づいて決められていた。

ナヴァホ族がおこなっていたベースボール型球戯である Aqejólyedi（run around ball）は以上の形式でおこなわれていた。この時期はベースボー



図3 ナヴァホ族のバット

長さ：32インチ（81.28cm）

先端を曲げた若木から樹皮を剥いている。シニーではこの部分でボールを打つ。もう一端は持ち手であり（図右端の色の濃い部分）、樹皮は剥かれていない。

Stewart Culin, Games of the North American Indians, Dover, NY, 1975, p.623 より引用

ルの完成の時期に重なり、この過程と併せて議論をすべき余地がある。

ゲームの様子は図1に示した通りである。この図は単純にフィールドと各ポジションの位置関係を示している。現代のダイヤモンドを示す時はホームベースを下に、セカンドベースを上にも菱形に示すが、ここでは横長の長方形に示されている。このことは当時の印刷技術の問題であって、特別な意味をなさない。フィールドの大きさを示すものについて言及されていないのは、プレーする人数の増減によって変更し、規格された設定がないからと考えられる。

各ベースに方角の名称がつけられているが、これは報告者による便宜的なもので、正式なものではない。また、その方角に置かれていたものではなかった。ベースの位置についてはアメリカ人のベースボールを完全に模倣したにすぎない。

ナヴァホ族のベースボールにおける進塁方向がアメリカ人のそれとは逆方向であった。これは太陽が昇って沈んでいく向きと同じである。このことはベースを1周するというを1日の周期に置き換えたと考えられる。農耕を生業としていた彼らにとって太陽の軌道は看過できるものではないからである。

ベースの名称が便宜的なものであるため、ピッチャーとバッターの対峙する位置について彼らの宗教的な宇宙観を述べることはできない。最初のベースに向かうにはピッチャーとすれ違う必要があることは、守備の人数が少ないことからゲーム性を損なわないためと考えられる。

ボールについては図2に示した。これはシニーに用いられたボールであるが、ナヴァホ族のボールの製法はこの詰め球である。袋状の動物の皮に樹皮を詰めたボールに弾力はなく、重いものとは考えられない。シニーではこのボールをスティックで打ちながら地上を転がすが、完全な球体でないため、まっすぐには転がらない。ベースボールにこれを代用し、打ったとしても現代の進化した

ボールに比べて飛ばないことが予想できる。このボールの機能と守備の人数がピッチャーとバッターの位置関係を導き出したと考えられる。

バットについては図3に示した。シニーのスティックがバットの代用品として用いられていた。片方の先端が曲がっている棒状のもので、シニーではこの曲がっている部分が打球部分となる。もう一端は直線状で持ち手部分が作られている。ナヴァホ族のベースボールではシニーと逆の方法で持ち、直線状の部分を打球部分としている。ボールにしてもバットにしてもアメリカ人が使用する専用の用具ではなく、自分たちの使い慣れた用具を転用していた。

ボールは収穫に悪い影響を及ぼす存在であり、当該の球戯ではこれを神聖な宗教儀式でよく用いられるオーク材製のバットで打ち飛ばす行為でもあった。異文化の中でナヴァホ族の宗教観による価値が見いだされたかどうかは課題として残った。同化を推進する中ではすでに存在するベースボールをおこなわせる方が合理的でありながら、実際はこれに類似した形でおこなわれていた。これはアメリカの支配下で彼らの文化を拒否したのではなく、ナヴァホ族の文化を取り入れながら受容していった形であった。

注記及び引用・参考文献

- (1) ギリシア・アテネにて1896年に第1回大会(夏季)が開催される。古代ギリシアでおこなわれていたオリンピックの祭典(古代オリンピック)をモデルにフランスのクーベルタン提唱によって始められた。
冬季オリンピックは1924年にフランス・シャモニーにて第1回大会が開催。パラリンピックは1960年にイタリア・ローマにて第1回夏季大会が、1976年にスウェーデン・エーレンシュルダスピックにて第1回冬季大会が開催されている。
- (2) 稲垣正浩著、寒川恒夫編、「近代社会のスポーツ」、『図説スポーツ史』、朝倉書店、2000年、pp.106-108。
野々宮徹著、稲垣正浩・谷釜了正編著、「1. 近代スポーツを形成した時代」、『スポーツ史講義』、大修館書店、1995年、pp.70-73。
- (3) 野々宮徹著、稲垣正浩・谷釜了正編著、「(3)近代スポーツの特質」、『スポーツ史講義』、大修館書店、1995年、

- p.76.
- (4) Sports Illustrated 誌の記事を読売新聞が取り上げ (2002 年 3 月 12 日付)、アメリカのプロスポーツチームの中にはアメリカ先住民族を象徴としたチームがいくつかあり、一部にステレオ的なイメージを残していることを報じている。
 - (5) Stewart Culin, Games of the North American Indians, Dover, NY, 1975.
 - (6) こうした研究には以下のものがあげられる。
 - ① James Mooney, The Cherokee Ball Play, AMERICAN ANTHROPOLOGIST, 3(2), 1890, pp.105-132.
 - ② Kendall Blanchard, The Mississippi Choctaws at Play: The Serious Side of Leisure, University of Illinois Press, 1981.
 - (7) こうした研究には以下のものがあげられる。
 - ① Theodore Stern, The Rubber Ball Games of the Americas, American Ethnological Society Monograph, 17, University of Washington Press, 1949.
 - ② Joseph B. Oxendine, American Indian Sports Heritage, Human Kinetics, IL, 1988.
 - (8) シシッピー州のチョクトー族 (Choctaw) はスティックボール (ラクロスに類似したアメリカ先住民族の球戯の総称) の競技連盟を持ち、恒常的に活動をしている。

ケンドール・ブランチャード、寒川恒夫監修／伝統スポーツ国際会議実行委員会編、「南北アメリカの伝統スポーツ」、『21世紀の伝統スポーツ』、大修館書店、1995年、p.78.

ノースカロライナ州のチェロキー族 (Cherokee) も10月の定期市でスティックボールをおこなう。かつては男性だけの球戯であったが、今では女性もおこない、儀式的な要素は失われている。

Barbara R. Duncan and Brett H. Riggs, Cherokee Heritage Trails Guidebook, University of North Carolina Press, 2003, pp.107-109.
 - (9) こうした研究には以下のようなものがある。
 - ① Stewart Culin, Games of the North American Indians, Dover, NY, 1975, pp.789-791.
 - ② Kendall Blanchard, Basketball and the Culture-Change Process: The Rimrock Navajo Case, Council on Anthropology and Education Quarterly, 5(4), 1974, pp.8-13.
 - ③ Janet M. Cliff, Navajo Games, American Indian Culture and Research Journal, 14(3), 1990, pp.30-31.
 - (10) Kendall Blanchard and Alyce Tayrol Cheska, 大林太良監訳、寒川恒夫訳、スポーツ人類学入門、大修館書店、1990年、p.61.
 - (11) 移動の年代については 5 万年から 3 万年前とも10万年前ともいわれる。

富田虎男、アメリカ・インディアン歴史 [改訂]、雄山閣、1994年、p.24.
 - (12) 西部劇に出てくるアメリカ先住民族がそのままの姿で受け取られ、本来の多様な文化の理解をされているとは言い難い。

デイ多佳子、アメリカインディアン現在、第三書館、1998年、pp.13-14.
 - (13) ロバート・A・トレナート・Jr. 著、齊藤省三訳、アメリカ先住民 アリゾナ・フェニックス・インディアン学校、明石書店、2002年、p.17.
 - (14) ロバート・A・トレナート・Jr. 著、齊藤省三訳、上掲書、p.17.
 - (15) 高崎通浩著、世界の民族地図、作品社、1996年、p.73.
 - (16) アーリン・ハーシュフェルダ著、猿谷要日本語版監修、赤尾秀子・小野田和子訳、ネイティヴ・アメリカン、BL 出版、2002年、pp.172-173.
 - (17) 食用に限らず羊毛を利用した敷物・織物の製作も同時期からするようになった。
 - (18) 谷本和子著、ヒツジがつなぐ伝統と近代—世界で一番タフなミス・コンテンスター、季刊民族学、118、2006 年10月、p.57.
 - (19) アーリン・ハーシュフェルダ著、猿谷要日本語版監修、赤尾秀子・小野田和子訳、前掲書、pp.74-77.
 - (20) ベースボール型球技のフィールドの俗称。フィールドに置かれる 4 つのベースを線で結ぶと、トラップの「ダイヤ」のマークになることに由来する。ベースボール型球技では本塁と 1 塁、本塁と 3 塁を結ぶ線には延長線があり、これらの内側がフェア・ゾーンとなる。
 - (21) Stewart Culin、上掲書、p.789.
 - (22) Stewart Culin、上掲書、p.789.
 - (23) Stewart Culin、上掲書、p.789.
 - (24) 日本プロフェッショナル野球組織／日本野球連盟／日本学生野球協会他編、公認野球規則2008、ベースボール・マガジン社、2008年、p.5.
 - (25) Stewart Culin、上掲書、p.789.
 - (26) ラケット (racket) はアメリカ先住民族がおこなう現代のラクロスに類似した球戯の総称。部族ごとにルールが若干、異なる。現代ではスティック・ボール (stick ball) と呼ばれ各部族で部分的におこなわれる例もあるが、そのほとんどは近代化している。チェロキー族のラケットは anetso と呼ばれていた。
 - (27) R. Fogelson, The Cherokee Ball Game: A Study in Southeastern Ethnology, Unpublished Ph.D., University of Pennsylvania, Philadelphia, 1962, p.100.
 - (28) シニー (shinny) はアメリカ先住民族がおこなう現代のホッケーに類似した球戯の総称。部族ごとにルールは若干、異なる。
 - (29) Berard Haile はアリゾナ州の聖ミカエル教会の牧師。Stewart Culin、上掲書、p.789.